

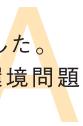


今回のサミットには、さまざまな議題がありました。食糧や原油の高騰、世界経済の混乱……。しかし「環境サミット」と呼ばれたように、最大のポイントは、やはり気候変動問題。この地球規模の課題に対しても、サミットでどんな活路を見いだせるのか、世界中が注目していました。

昨年ドイツで開かれたハイリゲンダム・サミットで、日本は「クールアース50」で提案している「2050年までに世界全体の温室効果ガス排出量を半減する」という目標の共有を目指して交渉し、各国首脳は「真剣に検討する」ことで合意しました。ここからさらに一步踏み込むかどうかが、今回のサミットにおける日本の「腕の見せどころ」でした。

Q1 今回のサミットの意義は？

7/7～9、北海道洞爺湖サミットが開かれました。
世界の首脳が集結したこの国際会議で、環境問題解決のため、何が決まったのでしょうか？



Q2 結果はどうだったの？

サミット2日目の8日、主要8カ国(G8)は話し合いの結果、発表された首脳宣言の中で、「2050年までに世界全体の排出量の少なくとも50%の削減を達成する目標」というビジョンを、国連気候変動枠組条約の全締約国と共有し、同条約下での交渉でその目標を検討、採択を求める」と明記しました。前回の「真剣に検討」から一步踏み込み、「半減」を実現するため、G8が結束していくことが合意されたのです。また、G8各國が「野心的な中期の国別総量目標を実施すること」も合意されました。今後、半減を本当に実現するためには、「共通に有しているが差異のある責任及び各国の能力」の原則に沿って、世界全体での対応、特に経済成長を続ける中国やインドといった新興国を含むすべての主要経済国の貢献が必要です。



Q3 主要経済国とはどんな話し合いがされたの？

今回、3日目には「主要経済国首脳会合（MEM）」という会議が開かれました。MEMとは、「Major Economies Meeting」の略。サミット正式メンバーのG8に加えて、オーストラリア、ブラジル、中国、インド、インドネシア、韓国、メキシコ、南アフリカの主要経済国8カ国が参加しました。元々アメリカが提唱した集まりで、昨年9月に事務レベルでの初会合が開かれています。これら主要経済国の首脳が2時間にわたって、気候変動の幅広い課題について、熱心に議論したこととは史上初めてのことです。

会議の前日には、ブラジル、中国、インド、メキシコ、南アフリカによる会合が行われ、先進国が温室効果ガス排出量の削減の達成をリードすることが必須であることを内容とする政治宣言が採択されるなど、G8各国との間には意見の隔たりがありました。しかし、MEM首脳宣言では「世界全体



Q4 サミット以後はどんな話し合いが行われるの？

での長期目標の共有を支持する」と明記されました。G8首脳宣言を肯定的に受け止めた内容と言つてよいでしょう。また、G8以外の主要経済国が、温室効果ガス排出に関する「適切な緩和の行動を遂行する」として、中国やインドといった新興国も、今後、中長期的に抑制に取り組む方針を打ち出しました。来年イタリアで開かれるCOP15（国連気候変動枠組条約第15回締約国会議）で合意されることとなっています。今年12月には、その「前哨戦」ともいえるCOP14がボーランドで開かれます。福田総理は最終日の議長会見で、今回のサミットでの話し合いの成果が、「国連での交渉に弾みをつける」という貢献ができたと思っています。「2050年に半減」を現実のものとするため、今後も粘り強い国際交渉が展開されていくことになるのです。